

**岡村駿（おかむらたかし）ヒアリングその2**

**2022年5月20日金曜日午後1時30分より**

**なか区民活動センター研究室**

**NPO 法人田村明記念・まちづくり研究会**

**（檜楨貢、田口俊夫、浅川賢司、青木淳弘）**

岡村 二つあったよね。都市科学研究室と開港資料館の問題ね。さらに、同じ文書課で開港資料館をつくってるときに大佛記念館っていうのも一緒に建設してるんだ。どうして向こうが先にうまく進んで、開港資料館のほうが後っていう、その関係が分からないでしょう。田村さんがこの本（『都市ヨコハマをつくる』中公新書）を出して、開港資料館の前のところが190ページになるけれども、そこで、何ていうのかな、嫌がる総務局を説得して、イギリスとの交渉が難航して、らちが明かないと。このまま成り行きに任すっていうわけにもいかない。そこで別途、以前から用意して用途をどうするか問題になっていた山手の土地に、大佛次郎記念館の計画を移すと。またイギリス領事館跡も、これが取得できた暁には、開国か開港にちなむ資料館にしたいっていう説明を議会にしてもらったということなんだ。ということは、誰が文書課でそれらの転換をやったかっていうと、見当たらないわけよ。どっかから力が働いて、誰かがそのプロモートやったはずなんだ。

田口 すいません。大佛次郎記念館も総務局文書課の所管ですか。

岡村 そう。所管っていうか文書課でつくったわけ。

田口 文書課の事業ですか？

岡村 そう。そうすると全体を調整した職員がいるはずなんだよ。その誰かが、最初は英国領事館の跡っていうことだから、いわゆるとげ抜きしたわけだ。要するに土地が使えるようにするとか、設計者を誰に頼むかとか、それからどんな体制で運営をするとか。それらを展開する人が、文書課には見当たらないわけ、総務局にも。いないにもかかわらず、なぜできたというのがあったわけ。

田口 勝手な解釈でいうと、企画調整局がやっていたのかなと思ってしまいますが、そういうわけではない？

岡村 その通り、企画の若竹馨（旧姓が三木馨）さんが中心になって属人的にやってるんですよ。

田口 大佛を？

岡村 大佛を。そんなもんだから、大佛記念館をつくるにあたって、ソフト、ハード含めて、彼がずっとかんでた。ただ、大佛さんの資料自体が文書でしょう、本だから。文書だから文書課で預かるっていう安易な発想で文書課が預かることになっちゃったわけだ。大佛さんの資料をね。そうすると、文書課が何かをしないことにはと。最初はもう文書課は、ずっとイギリス領事館跡でやると飛鳥田がいつてるもんだから、あそこでずっと。

岡村 それで調べたら、要するに若竹さんが中心になったっていうのは、企画のほうから、文書課の職員がいわれて、設計者の浦辺さんの所に行ったら、浦辺さんがあんな連中と一緒に仕事できないと、断られちゃったらしいんだね。それで慌てて若竹さんが、倉敷、行って、心配するなど、企画の方でやると。そんなら私も横浜で仕事をやりたいけど、こないだ来た人たちでは、とっっても一緒に建物をつくり上げていくなんていうことはできそうもないからという……。

田口 こないだ来た人っていうのは、どういう人ですか？

岡村 総務局の、文書課の人かどうかは分かんないけども、事務方の局の誰かが頼みにいったんだろうな。行けといわれて。だから、行けといわれただけであったから、口上を言っただけであってさ。何ていうの、設計者の気持ちを動かすような、モチベーションを高めるような、そういうような説得力がなかったわけだ。経験上からいって、浦辺さんから見ればそういうところと仕事はしないほうがいいと考えて、断ったの。それで帰ってきて、断られたっていうんで、若竹さんがもう一度。

田口 断られたという事実はどこに記録が残っているのですか。

岡村 記録が残ってるっていうより、私が先日若竹さんに直接電話して、「大佛記念館のプロデュースは、あたなたでしょう。他に見当たらない」って言ったわけ。県の方でも、大佛さんの資料をねらっている裏ボスの人がいて、その娘さんは大佛さんの奥さんの処で行儀見習いをしていた。

田口 すいません。これはちゃんとした記録にしたいので、不明確なところはその都度、質問して明確にします。

岡村 いいです。

田口 県の職員ですか？

岡村 県の。けども、そういったそれまでのいろんな裏処理みたいなことをやっていた。大佛さんの資料、本当は県でも欲しかったんだけど、飛鳥田がパリ・コミュニケーションやドレフェス事件の資料があるからどうしてもうちに欲しいとって、大佛さんが飛鳥田のほうに、つまり横浜市のほうに渡す、残すということになったらしいんだな。

田口 なるほど。それは田村さんの本にも書いてありますね。

岡村 それで急きょ文書課に。それまでの管轄では文書課に書籍類は預けたわけだから。寄贈先の管理元が文書課だったわけだよな。そんなもんだから、資料は受けたものの文書課がその後、それらを、どう転がしてくのか、誰も要するにプランなんか立てられないわけだよな。まだやらなきゃいけないことも残ってるわけ。イギリス領事館、もらってるわけじゃないから。それをまず、いつになるか分からんからってということで移さないで、場所を。

田口 山手にね？

岡村 そう。どう見たって、山手のあそこのサンクンガーデンっていうのかな、あそこの所の土地やなんかをいじれるっていうのは文書課にはないわけだから、単体では。そうすると、ストーリー持ってるやつじゃないと。つまり、だから企画の中では、田村さん含めて、どういうふうにしていこうかという話はできてたんだな、きっと。

田口 『田村明の闘い』に載ってたかな。当時、市民の人から意見の手紙が来て、あそこはこうすべきでないか、と。

岡村 あそこはっていうやつね。その話あるけど、あれは多分、つくりもんだと思うんだよね。

田口 フランスじゃなくて、イギリスじゃないかとかね？

岡村 そう。それが一つと、日本で唯一しかない開国開港の地を個人の記念館にするなんていうのは、おかしいじゃないかと。

田口 一つの大きな戦略があって、そういう話を使って脚色したってことでしょうか？

岡村 そう。

田口 当然ですよ。

岡村 そう。それで結局、ここを文書課に置いといたってどうにもならないわけだし、かといって、企画がむき出しになって、一事業に関わるっちゅうわけにはいかないから、プロモートをするっていうだけになるわけでしょう。そこで急ぎよ、「朝日」と、それから「神奈川新聞」と県（教育長）と、それから横浜市（総務局長）と、この4者で財団をつくったのわけだ、大佛次郎の諸資料を処理する。

田口 朝日新聞と神奈川新聞？

岡村 朝日、神奈川新聞。神奈川新聞は朝日系の地元誌。うん。子会社っていうかね。あと、県と市と。それで財団をつくって、そこで方向を決めると、どうするかっていうのは。そうならしいんだよな。

田口 その財団の市の窓口というか、親元は誰ですか。

岡村 だから親元は誰かじゃなくて、一応、朝日は朝日でやっぱり主張するし。

田口 だけど、一応、そういう組織つくったっていうことは・・・。

岡村 それは私もそこまで聞かなかったけども、市から誰か職員を出してるはずなんだよね。要するに私がいく前のことだし。

田口 結局、企画調整がその親元になるわけじゃなくて、多分、総務局の・・・。

岡村 総務局の誰かなんだよ。

田口 文書課が一応、形式上は親元になってくるのですよね？

岡村 うん。だけど、文書課は事務的にはやっても、それはあれだと思っただよな。その財団つくるとすると、理事みたいな置かなきゃいけないわけでしょ。理事長っていうのも置かなきゃいけないわけじゃない？ そうなると、課長だとかそういうレベルじゃ済まないわけじゃない？ そうすると、行政部だからな、文書課っていうのは。総務局行政部の部長あたりか、さもなきゃ総務局長とかさ。名称上にはそういう形になって。けども、それ支えるところがないわけだから、文書課じゃね。そうすると、文書課はいつも企画に、指示

を仰いで、。四つの窓口、事務上の処理まででは文書課になるわけじゃない？ それを千装さんっていうの職員が担当してたんですよ。

田口 千装さん？

岡村 千装っていう、千の装って書くんだけどさ。装うっていう字。

田口 文書課で？

岡村 文書課で。あたしがいったときにね。「あんた、何やってるの？」って聞いたら、「大佛、担当してます」と。ところが文書の持ち廻りのような端仕事しかしてないわけだよ。今度、財団が開かれるから、その場所だとか。それから、預かったものの台帳を作んなきゃいけないじゃない？ その台帳作りのアルバイト対応をやったり、作業場所を、取りあえず、確保してというようなことをやってたわけよね。けども、頭の中に、じゃあ、設計者を誰にして、どういう段取りで展開するかなんていうのは、そこから出てくるわけないよな。出てくるわけないけどもと思ったら、やっぱり若竹さんだな、結局。鎌倉の大佛夫人と何度も話して、気に入られちゃったわけだな、かなりね。寄贈はもちろん受けてるわけだから、受けた後の進行等についても、裏工作しなきゃいけないんだよ、多分。ちょうど『天皇の世紀』っていうのを大佛さん、書いてたから。それ、ものすごく「朝日」のほうでもつながりが強いっていうのかな、ソフトのほうに関しては。それで朝日と神奈川だから地元紙ってことで引っ張り込まれただけで、あと横浜市と神奈川県と。それでどう構成したかって、4人、4社がつまり一応、中心になって財団をつくって、そこが中心になってことを進めると。けども、建物とかそういうこと、それから運営ね、特に。あそこ、大佛次郎賞っていうのを「朝日」がやってるでしょ、お金、出したり。

岡村 毎年、文学賞みたいなの出してるんですよ。だから、そういうソフトのところは朝日のほうがいろいろいったんじゃないかな。その他に横浜市ではゴリさん、高橋ゴリさんが関わってるかなと思ったら、大佛には関わってなかったようだ。彼が関わったのは、どうも、英国領事館がぎりぎりにきて、買収できそうだと、そのときの通訳かなんかみたいな形で、2年かそこら、それだけ関わったんじゃないかと思う。

田口 時期からいうとそうですね。

岡村 どうもそんなんで、若竹さんに聞いたらば、その時代の流れとかあったけども、あれは全部、自分たち企画でやったと。

田口 最近、聞かれたんですか。

岡村 最近じゃない？ あなたがいくつか質問、出したから、一回目の原稿に赤、入れ終わってから、今日、この会議があるんで、それで若竹さんに電話を入れて、「大佛のプロデューサーは誰がやった？」って言って、「あんたしかいないと思うけども」と言ったら、「よく分かったな」って言われた。もう一つは、資料って置いとくと、関わる人間が多くなってくるにつれて散逸してくるんだよな。「朝日」の人も来ちゃ、ちょっとこれいいかなっていうんです。次、行ったときにはなかったとか、そんなことも。だから、早いとこ事業にけりつけなければと。そうすると、もうそれと同時に浦辺さん自身は、英国領事館ではどうもかたいと、ハード過ぎるというので、それで、場所の変更。

田口 山手ですか。

岡村 あそのサンクンガーデンの大佛の記念館ができてる所はいま、市の普通財産になっている。

田口 そうですか。

岡村 面白いんだよ、すごく、こういう建物の建設や資料収集に触ると、そういうドラマがたくさん出てきてさ。例えば、私が総務局にいつてから、5年間の間に文書課は開港資料館、ゼロから立ち上げて、それから大佛記念館。二つもつくってるわけよ。それでやってる職員は2人しかいないわけよね。とげ抜きがいくつかされてあったわけ、開港資料館のことを考えると。例えば、公文書館でどうのなんていう構想があったなんて、あなた、しゃべってたよね。それは全然、誰も本気で考えたプランじゃない。ただ、なんか書かなきゃいけないというんで、それで、文書係長かなんかがちょこっと書いたんだけども、使いもんになんない、話になんないわけだよ。そんなこともあって、結局、若竹さんがプロモートする形であります。だけど、おかげで浦辺さんは、その間にずっと英国領事館自体がインプットされてたわけだ、もう。だから、資料館を設計するときに、その下作業が全然いらなくて、すぐできちゃったわけじゃない？ そんなのがあって、田村さんは資料館をやるときに、私を連れて、浦辺さんに会わせ、「彼が全部、仕切るから、ご心配ないように」っていうことで、紹介されてさ。それで、始まった。だから結構、地盤整理っていうのかな、それが極端に言えば、設計の一部まで、一部っていうか基礎まで終わってたんだ。それで早く私のほうはきちっとしたソフトプランを作り直してね。あそこはもともと、先の田村さんの繕い話から始める必要、なかったわけ。もう大佛も山手で建設、始めちゃったわけだからさ。僕はもう開国開港資料館。大体、どう考えたって、公文書館があんな狭い所にできるわけないんだからさ。で

しょう？ 幸いなるかな・・・。

田口 あんな狭い所ってというのは、今の開港資料館の所でということですか。

岡村 そう。あんなんで公文書館なんていうのはさ。

田口 それは全く不可能ですね。

岡村 話にならないでしょう。

田口 収蔵庫がどこにあるのかしらって話になりますね。

岡村 そうでしょう。それで、もう一つ、その辺のところで入れるとすると、行政部長でミヤハラっていう人がいたんだけど。これも面白いやつで。私と気性がものすごい合ってね。開港資料館は彼と一緒にいたからつくれたんだけどさ。そのときにやつがいれば、大佛やなんかの判断も早い、それに付いていけるし、それからさっきの勢いで答弁、変えるというようなのもできたと思うんだよな。鹿児島出身で、早稲田、出た、面白い人だったけど。だから、そういう点では誰もプランを作る人はいなかったけども、やる地盤はできてたわけだな。どうも、そこのところがね。田村さんの本の前のところの文書課のところ、ちょっとなんか文書課の中に全部、そういうのがあるような感じがするじゃないですか。

田口 というよりも、大佛資料館が、そういえば文書課の所管なのかと、今、思いました。

岡村 文書課の所管なの。だから、そこのところにつくれちゃったから。こっちはそういうことは全然、関係なしにやって、近づいていくうちに、こないだの電話で、「だって、千装自身がプランニング面を一切、やってないって、おかしいじゃないか」って言ったの。そうしたら若竹さんが「あれは企画が表に出ないで、つまり裏調整で事業を進めるという、要するに田村流のやり方をやったんだ」ということで、本人がちゃんと自白してるからさ。もし不安だったらって。けども、詳し過ぎたからね、あの土地を巡っての話だとかそういうのが。で、おかしいなっていうことを思い付いて、確かめの電話を入れたら、そういうことだったですよ。

田口 ありがとうございます。

岡村 それが一つね。それともう一つは、都市科学研究室っていうのは、この前の話でも出てたけども、性格付けだとか何とかっていう、難しいのは何なんだろうっていう疑問があっ

たじゃないですか。飛鳥田から見た、つまり市長がどういうふうに感じてたかと。それは、田村さんだ鳴海さんだって、いろいろな考えあったかもしれないけども、飛鳥田自身は、ここに彼の自叙伝、回想録っていうんだよな、『生々流転』っていう本があるでしょう。あれの中に私のことと、それから松本さんのこと、両方、出てるわけよ。私のほうはいつた世論調査、「市役所の都市科学研究室に中央大学の横山桂次先生の弟子だった男がいてね、市に入る前から調査をやってもらっていたんだ」。田村さんがやっていたように、各地域に呼ばれてコンサルだよな。それで結構、地域の資料を当たって、「全国でいろんな革新市長が選挙が近づくとやってくれて頼んでくる。横山研究室の政治意識調査だということやって、後でそのデータを基にして、選挙戦でどうしたらいいか、処方箋を書いてやるわけ。各地区ごとにどんな要望が多いかを調べて、ここじゃこういう問題、ここじゃゴミ問題って具合に演説の内容まで変えたんだ」。こないだ話したような。つまり、彼にとっては、それでもう私はいいんだということだよな。だけど、普通の役人じゃできないわけじゃない？ もちろん、こっちも役人になろうと思ってきたんじゃないで、その研究室ができて、そこを使って自由にやってくれていうから、それなら面白い。

それから松本さんについては、「忘れられないのは松本さんだ。都市科学研究室室長で、彼が作った2冊の市民生活白書だよ。ずっと朝日の記者で、論説委員までやった人。44年に神中の同級生だった岡田行雄さんはそのとき、ちょうど「朝日」の政治部長だった」、が来て、近く定年になる人がいる。それまで全然、知らなかったけども、岡田が推薦するんだから間違いのない人だろうと、市に入ってもらった。彼のために都市科学研究室をつくって、好きなことをやってくれといった。そうしたら白書を作ってくれた。徹底した現場主義で、研究室の職員4人で白書を作るんだろうと。とにかく現場に行き、きちんと取材しない限りは、1行たりとも書かせないんだよ。市の抱える問題、矛盾、これがストレートに出てる。しかも現場を知った重みがあるから、より素晴らしいよ。人柄もすごくよい人だから、自然と若い職員が周りに集まって、ディスカッションするようになった。『松本学校』って呼んでたよ。市民のための市政といいながら、機構や人員の問題で、本当に市民が求めるところまで手が回らないなんて不満を吸い上げて、僕に意見する。とても参考になった。だから、松本さんがいたっていうことは、白書だけじゃなく、有形無形の効果があったね」と。

「彼は昭和52年の相模原市長選に出馬してもらったんだ。僕も力を入れて、何度も応援にいったし、研究室は2回、世論調査をしたよ。それも松本学校の生徒40人が3日間、休暇を取って、手弁当でやった。彼の人気分かるだろう。結局、負けちゃったんだけど、今、思うと、あの選挙で草の根民主主義の実験をしたんじゃないかな。彼、昭和56年にがんが死んじゃった」と書いてあるんだけど。

そういう形で、つまり市長から見ると、遊軍のたまり場みたいに考えてたんじゃないかと思うんだよ。都市科学研究室っていうのは、なんか難しくっていうよりも、そういう人たちが自由に。そういう人たちっていうのは、何もそこにしがみついてどうのこうのっていうこと、関係ないわけだよな。ばかっときてばかっときやめたり、けども仕事はちゃんと押さえ



られるというね。そういうところと、彼は位置付けてるから、だから私が、普通だったら市長が、1カ月ちょっと行ってくれる？とか、3カ月、相模原、頼むななんて、言わないだろう、それはさ？もし、私が役人だったらタブーだよな、そういうのはな。だけど、こうやって新聞に、このときも名前、出していいかと記者の方から心配されて問い合わせがきたが、それは得策でないだろうと。要するに市役所の改革のほうの意味があると思って横浜に残ってるんであって、残ってやる以上、今、都市科学研究室の岡村なんて名前、出されたら、やりにくくてしょうがないよっつって。そんな背景もあって横山桂次先生のお弟子さんって、書いてるからさ。飛鳥田にとってはそういう配慮は必要ないわけ。もちろん、それで文書課のほうに企画調整局の都市研のほうから移ってくれていわれて、文書課じゃなくても、どこでもいいから移ってくれていうから。

じゃあ、松本さんと私とで一つの枠組みができたかっていうと逆で、何をやったかっていうことだと思うんだよな。その7年間の間に。それは一つは、この第1回の白書が『新しい横浜への展望』で、これは鳴海さんが横浜に行って、取りあえず、今、厳しいところにあるというのを白書形式で訴えたわけ。第2回目が41年の11月『新しい横浜の記録』ということで、その4年間の市民参加だとか、無秩序開発の告発と市財政の危機とか含めて書いて、それで、市政の課題を紹介したんだけど、第3回が46年、主題が『横浜と私』で副題が市民生活白書、もう切り替えたわけだね。第4回の市民生活白書が『私の横浜』ということで、この2冊。これにも出てるね。横浜、ここです。

「それで、横浜市民が自分たちの生活と気持ちを自分たちの言葉でつづり、自分たちの手で編集して白書を作るとすれば、どんな内容のものになるだろうかと。そうしたものに少しでも近づけてみたいというのが、この第4回、市民生活白書の課題である」と。第1部、私の横浜では、課題に接近する一つの試みとして、市民が直接、執筆した生活作文の収録に多くの紙面を割いたと。第2部、横浜の私たちでは、インフレ下の市民の生活不安を、数回のアンケート調査と個別面接取材の結果から分析して、そして市民生活の多層性と、市民の要望が福祉に強く傾く事実。この他、発言層と沈黙層、また弱い立場の市民、自治体の制約と可能性などにも触れて、第3部、横浜の10年っていうのは図、表を中心とした市政の紹介で、都市づくりや市民福祉など、10年の実績を手短かにまとめた。

ここの部分だけは企画調整室の若い人たちがやって、あとこの1から3までは松本さんと私と中川さんの3人と、あと前野良さんっていうのが、ちょうど始まりかけた区民会議を、長野大学から囑託でね、毎週、よく分かんなかったんだけどさ。イタリアの構造改革派の研究者でね。それでやりました。

そのとき、初めて田村さんは企画調整局長になったんだけど、これの出版のときに。この本の後書きが田村さんの横浜市企画調整局長、田村明の使い初め。それでこれも現在、保存された国道17号線の脇にある、三国峠の話が出てたでしょ、昔。これがそっくりそのまま使われてる。だから、そういう点では、役所の有償販売で再販もできて、採算も十分、取れてというのが、この『私の横浜』というやつ。これはだから、松本さんと手を組んで一緒に

作った。だから、ばらばらな仕事じゃなかったわけだよね。松本さんがどういうふうにとまってきたかっていうと、結局、これ、中川さんたちに聞いたろうけども、庁内報だとか。これは「朝日」の夕刊のコラムで、この頃から情報公開だとか知る権利の問題、そういうのが政治課題になってきたわけだよね。そうすると言葉。そこに触れて研究してるところなんてなかったわけさ。その頃ね。これを渡しますよ。「朝日」の夕刊に「今日の問題」というコラムが出てるでしょ。それです。

田口 それは松本さんが書いたんですか、じゃなくて？

岡村 違う。この本自体を紹介したわけ。これはだから、横山悠さんだとか、中川さんなんかにも聞いたっていったじゃん。これは松本さんの原稿っていうか、これ、庁内報だとか役所で書いた文章は、全部、ここに含まれていますよ。それはそれで見てくれればいい。その後、相模原で選挙、負けてしまって、敗軍の将は語らずというのが習いけども、あれは何だった、どういうことだったんだというので、自分の責任として書いたんだよね。だから、各政党との関係だとか、それから金はどれくらいかかったんだとか、どこがずれてたのかとかね。それはそれでこの中に入ってますから。

私のほうは何をやったといたら、これ記録「革新自治体」という冊子を出した。調査季報を作ってたから、これは調査季報と同じ78年だったから78ページサイズで割り付けやなんかは全部、調査季報方式でやったから、三か月で出来た。だから、これは、これもまたものすごく好評で、「毎日新聞」なんてこんなにでかい形で紹介して、それから、「朝日」、「神奈川」とか、各紙全部。それはなぜかっていたら、びしっととした視点から、要するに、何ていうんだろう、ちゃんと総括してるっちゃうわけ、いろんな側面からね。で、私としては、都市研でやってきたまとめがこれで、松本さんのはそちらということで。だから、これが今のチラシ。それでこういう形でやって、その中に、「政治の論理と行政の病理」という松本さんが書いたやつですよ。それから、「飛鳥田市政と市民との距離」というのは中村紀一。それから、「飛鳥田来たり去る」というのが市役所の社会党党员。これは持つてるだろう、これね？

田口 はい。

岡村 だから、それを作って78年に出して。そうすると『私の横浜』、「私の都市科学研究室」というのはこれだったし、「松本さんの都市科学研究室」は、ある意味ではこれから役所の刊行物のいろんなところに、庁内報だとか何とかだとか、そういう人たちと話をしながら、あとは内部取材をしてきたということじゃないかと思うんだよね。

田口 そうすると、岡村さんの都市科学研究室でのお仕事、もしくはそこでの生活というの

は、市民生活白書ですか？

岡村 まず調査季報よ。

田口 調査季報ですか。

岡村 四半期ごとだから、3カ月に自分が研究したことっていうか、テーマとして選んだことは、一応3カ月にまとめて出さなきゃいけないわけだ。それが、何ていったらいいんだい、役人としての、税金を使って部屋を貸してもらって、資料を買わせてもらって、現場も自由に取材させてもらって、こういうことでしたという責任だよな。それは調査季報の原稿で、また特集を組むとか、それがまず第一ですよ、調査季報の。

田口 すいません。話をちょっと細かく切っていきますけど、飛鳥田市長から見ると岡村さんの有用性というのは、いわゆる世論調査、選挙に関わる世論調査の専門家として、岡村さんっていう存在は認められていました。それからもう一つは、松本さんとともに市民生活白書という大変な作業をおやりになってきたということ……。

岡村 それとあと役所の若い人たちとの交流。大学の卒論や修論を書く人たちの来訪も多かった。

田口 若い人たちとの……。

岡村 つなぎだよな。

田口 自主研究会？

岡村 自主研究会みたいなものを立ち上げることに。要するに、こっちがずっと面倒を見てるんじゃなくて、便宜を図って立ち上げて、立ち上がった自分たちで運営するのよと。必要な、もし、資料とか何とかがあるんだったらば、いってくれろっていう。

田口 それともう一つは、定期的に年に4回出す調査季報というものの企画と、テーマの企画と実際の取材と編集、発行までもトータルやったという理解でいいですか。

岡村 そうです。だから、一部政治的なところもあるんだけど、ここからここまでは私っていうのがあるわけよ。それから生活白書向けの調査をして、「横浜の市民たち」っていう、「囲み」で、見易く表現する。要するに調査全体をまとめたらこのくらいになっちゃったわ

けよ、いろんなの。

田口 すいません。僕が分からないのか、一緒にいる2人が分かって聞いているなら、僕はいいんだけど。今、言ってることは分かっていますか？

青木 ええ、もちろん。

岡村 調査季報じゃなくて、あれを見れば一番、よく分かるんだよな、白書な。

田口 いや、今、岡村さんが言われてる調査っていうのは、どの調査を言っているのですか。

岡村 どの調査っていうのも、頻繁にやってるから。

青木 いろんな種類がある……。

田口 違う、都市研で頻繁にやっているのは、いろんなテーマでやったやつと、もう一つは市民意識調査を毎年やっていますよね。

岡村 あれは毎年だな、毎年。

田口 それとか今まで聞いた出稼ぎの調査もあるし、木賃アパートの調査もありますよね？

岡村 うん。

田口 それ以外に調査季報でいろんなテーマで、各局であるいは各グループで、いろんな調査をやったり、研究会をやったりして、それが集大成して年に4回の調査季報が発行されるというイメージがあるじゃないですか。

岡村 うん。だけど、それは私1人で全てをやっているじゃなくて、松本さんが編集後記を書いて、精神の問題、倫理の問題をやるとか、中川さんが福祉の問題で特集を組むとか。

田口 調査季報そのもの？

岡村 調査季報そのものをね。それから、その他に例えば、持ち込みみたいなのもあるよな。こういうのやりたいんだけど、じゃあ、使いなさいよ。全部ね。ただ、私たちがご相伴し

たっていうのかな。例えば、水なんかそうだよ。水道局の専門的なね。

田口 だから、そういうものをさばくのもあるし、先ほど来言われている、調査と言っているのは、その調査季報の企画ものとしての調査じゃなくて……。

岡村 企画調査じゃない。主に全市調査。

田口 木賃宿とか出稼ぎだとか何だかんだとか、そういう調査をやっていたじゃないですか。

岡村 やってた。

田口 それを言われているんですか。

岡村 それも含めてね。例えば市民の性格、人口構成から……。

田口 それは……。

岡村 統計的に出てくるよな。

田口 白書のためにやっているのでしょうか？

岡村 そう、やったんだけど、そこだけで普通の白書、終わりになっちゃうわけだ、普通はね。私はそこをいっぱい書いたわけね。書いたらこんなになっちゃうわけだよ。こんなじゃどうしようもないよと、私も分かったしさ。もう二度とこの手法は嫌だと。松本さんと決めたわけ。もっと課題を絞ろうと。んだけど、それはさっき言ったこの何部構成で、作文のところがあるんだけどさ。

田口 今、言われているのは白書？

岡村 白書、この『私の横浜』のときの白書。この10年っていうのは、企画調整局のほうで作ったわけ、公式に。10年の資料、歩みっていうのは。

田口 それは白書の中？

岡村 1部、2部、3部、とある。

田口 白書の中に入っているんですか。

岡村 そう、中に。よく付いてるじゃないですか、1ページ見開き分で。私が言ってるのは、この市民のプロフィール。これを全部やったときに、例えば横浜のおばさんたちと、それから東京の調査と合わせて、服装、普段着がどんなんだとかさ。朝日の世論調査室と、こっちも組んでたから、共通問題を・・・。

田口 そのための、白書のための調査の膨大な基資料があるってことですよね？

岡村 そう。

田口 それを白書の本にまとめるときは、こんなふうになっちゃうから・・・。

岡村 なっちゃって、しなきゃ駄目なわけなんだよ。

田口 それはそれでいいけども、それをうまくもう一回、加工し直して、例えば調査季報の研究、こんな研究あるぜっていうんで、載せたりもしたっていうわけですよね？

岡村 そう。

田口 それだったらよく分かります。

岡村 だから、こういうふうに見える化するってやつだ。飛鳥田さんの選挙でもこのグラフ読んじゃえば、1期、2期、3期、どういうことが起こってたんだというのが分かっちゃう。だから、ここで全国の、例えば毎日新聞が全国調査をしたというのと、こここそ、逆にいえば、もう変わり目のときだったんじゃないかと。

田口 そうか、だから、すいません。だから、いっちゃなんだけど、選挙のための世論調査だったのだけど、それって結構、奥深く、総合的にやってた・・・。

岡村 そう、そっちの端数。

田口 結構な生データを岡村さんは持っていて、それを研究的に加工し直すと、十分なる調査研究論文ができちゃって、それをじゃあ、時たま調査季報にも載せたりもするしということも、十分、できましたということですね？

岡村 そう。今、言ったのは、それを、だから白書の第1部の作文のところの合うようにすると、もうスペースが決まるわけじゃない？ そうすると、一つの出稼ぎだと4こましか使えないと。4こまでこの調査の焦点を、うまく面白がって見れる・・・。

田口 分かったのは、だから、ここだけの話をいっちゃうと、中川さんが、「岡村さんって何やっているのだろうか、よく分かんない人なのよね」って言うてたりして、僕もそうだろうなとは思っただけだ。今、聞いて、そうか、岡村さんって基データを世論調査で沢山持っているから、実は横浜市の市民の動向とか将来とかいう、考えるデータを持っていた人なんだと。

岡村 それがないきゃ、だって、あれ、できないわけだよ、いろんなリードを。

田口 分かります、だから、その・・・。

岡村 金がないんだから、都市科学研究室なんていうのは、それがあから、そのために使えそうな調査で、例えば港湾局で使い残してる金があるっていったら、じゃあ、私は知らんぷりして使ってあげようかと、調査に協力して作業に加わる。市民局が出稼ぎ者の調査をやりたいんだけど。どうやっていいか分かんないとかさ。向こうが金、持ってくるわけだよ。だけど、全てがこちらの思う通りじゃないけども。やり方次第によってはさ。それを市役所の調査だけじゃなくて、いろいろなネットワーク持ってたから、「朝日」の世論調査室ともやって、さっき言った服装だとか、子どもの遊び時間だとか、それから場所だとかね。そういったのを横浜の場合と東京のデータを比べると違うんだよね、やっぱり出てくる結果が。

田口 それってやっとな、すいません、きょう、事前をお願いしたテーマに戻ってきているのですが、科学的な行政とは何かというのが、きょうの議論のテーマです。つまり、もろもろそのデータがなければ、思い付きの行政でしかなくなっちゃうわけですね。僕はきょう今に至るまで、岡村さんは、選挙の世論調査とまちづくり、都市経営のそういう生データと違うのかなという、今に至るまで思っていたから。ところが、これって実は使えちゃうわけですね？

岡村 そう。

田口 十分、使える？

岡村 だから質問作りなんだよ。

田口 よく分かりました。

岡村 これなんかさ。例えば、これ、飛鳥田の調査、やってるんだけどね。なんつったらいいのかな。最後に聞いてるんだよ。もし社会党が市長の候補者を立てるとしたら、生粋の社会党の人でなくても、飛鳥田市長がやってきた革新市政の政策を引き継ぐとはっきり約束のできる人を選ぶべきだという意見があるけども、これはどう思うというので、その前に評価させるわけ。七つか八つ。それで、それを平均点で七十何点とか何とかいうじゃない。変わっちゃうってということなんだよ、これが。つまり単純なんだよと、これ。あなたがたは細郷を連れてきたけどもね。絶対に、要するに理不尽に荒びないような真面目なやつね。竹田四郎なんて参議院議員がいたけどさ。あんな硬い真面目な候補者がいいんだと。その代わり、飛鳥田が横に付いて、これと今までの力で続けますと。私ももちろん中央でやるけども、横浜は彼に任せてくださいということをいえば、それで上がるんだよと。それ、いわれちゃ困るわけよ。だから、マスコミは知ってたわけだよ、私がちょっと動いてやってたっていうの。鳴海さんはもう右往左往するわけだ、その間でな。それは発表されたらば困るわけさ。

田口 その方式を打ち出せば、別段、細郷さんを使う必要はなかったんですよ？

岡村 そう。だけど、それは現実の力の中で、やっぱり出来きないんだよね。その頃、社公民だったからね。公明党とかさ、民社党が先に細郷。

田口 すいません。ちょっと脇にいつちやいますけど、つまりそのデータの、そういう調査研究のデータ、まさに科学的な行政の根源だと思うんだけど、それと一応、田村明研究会なんで、田村さんは岡村さんのそれをどう見てたんですか。そういう科学的行政の根源みたいなとこだけど、いや、あれは選挙用だよっていうふうに見てたんですか。

岡村 いや、それはあんまり関心、持たなかったんじゃない、自分のことに忙しくて。

田口 つまりそれはなくても、田村さんはやることたくさんあって……。

岡村 そう、だから全然ね……。

田口 関係ない？

岡村 関係ないんだよ。ただ、今度は私のほうの結果は、必要な人にはどうしても必要なんだよ。だから、そこでの指揮命令系統とかないんだよ。それは、市役所の行政調査ではない



から。

青木 それを必要としたのは、やっぱり市長とかそっちのほうの政党とかマスコミですか。

岡村 そうです。

青木 企画調整室、企画調整局とかではなく？

岡村 そんなんじゃないくて、市長であり鳴海さんであり・・・。

青木 ということは、都市科学研究室というものが向いてたのは、やっぱり一番は市長？

岡村 だってそことの契約でやってるんだからさ、いつも。

田口 そうなんだけど、一応、田村明なるものは科学的な行政を標榜しながら、まちづくりをやってたということに一応なっているの。そうすると、田村さんはいろんな戦略性を考えるとき、科学的なデータは持ってたのか、持ってなかったのか、直感でやったのか、あるいは今までの知恵で・・・。

岡村 それは田村さんもどさ回りしてるから、分かってるんだよ。四国の香川かどっか？

田口 やってました（注：田村が環境開発センターに入る前に浅田孝を手伝って作成した『香川観光総合開発マスタープラン』）。

岡村 やってたでしょう？

田口 あれ、結構、詳細な調査ですよ。

岡村 そうでしょう？ そういうのやってるから、香川の所と例えば横浜の生活、もちろん個性が違うよ。違うけども、そういうベースは、田村さんの中には当然あるけれども、まだそこまでいっちゃうと、他のやつはついてこれないと。取りあえずは、田村さんのいってる六大事業だなんだっていう、それを理解して、そして、職員自体が高めて、それで仕事に取り組むんだというところであってさ。本当は、だから、私なんかから見れば、そういうデータっていうのがあるから、一緒に。だけど、一緒にやったって駄目だったと思うんだ。二つ、田村さんとはあって、私はそれでこの調査が終わって、もう飛鳥田市政が終わるんで、彰国社から出てる『土木工学大系』っていうのがあるでしょ。その『土木工学大系』の21号に、

「都市環境論」っていうのがあるんだ。

田口 はい？

岡村 「都市環境論」っていうテーマの本に私は、この間ずっと横浜にいたときのことから、最後のさっきの飛鳥田の選挙のことだとか、それも含めて書いたわけ、報告書（「大都市住民の生活と意識－「横浜」における体験と資料から－」として。

田口 土木の専門誌に？

岡村 そう。『土木工学大系』に、ソフト面から見たまちづくりの実情をまとめて欲しい、と。

田口 岡村さんが？

岡村 うん。で、社会工学ってあるじゃない？ 東工大の社会工学科昔永井さんっていう文部大臣がいて、その方が京都から来たときに連れてきた先生の研究室。だから、五島君のとか、それから橋田君とか、あの連中たちの研究室に、私も国内留学で横浜市から、行っただよ。遊びに行っただよ。遊びに行っただよ。調査の支度金持ってさ。要するに、鳴海さんとしては、一生懸命、仕事やらせたかったけど、出させたかったわけだよな、都市科学研究室を。そうでないと、ますますそれが、何ていうのかな、目の敵にされちゃうだろうからね。

田口 すいません。今、言われたの、何となく分かるんだけど、正確には分からない。

岡村 正確には分かんない？ つまり、都市研の根本はこういうところにあってというふうに、自民党だとかその他の議員たちが騒ぎ出すだろうと。それだけじゃなくて、要するに違法っていう・・・。

田口 岡村さんが都市研でやってることをですか？

岡村 というか、要するに都市研でやってる仕事はっていうことになっちゃうわけだよな。仕事以外のこと、要するに役所の仕事以外のことをやってると。

田口 革新市政、革新政党の選挙のためじゃないかという見方もあると？

岡村 そう。それだけじゃなくて、あそこが指令を発してて、悪の本丸はあそこなんだと。そこの根を絶たないと、こっちがやられる。

田口 これ、テープ起こししたとき、ちゃんと書かないとよく分かんない。今、何を言ってるのかよく判りました。

岡村 分かった？

田口 はい。

岡村 よくあるんですよ、そういう話。それでみんな異動するじゃん……。だけど、それでも、私自身、別に役人と思ってないからさ。何いってるんだというふうにやるから、余計かわいくないわけで、鳴海さんなんか問題児って私のことをいってたけどさ。やっぱりそこをうまくやるように、と。

田口 それで、だから東工大の社会工学科に、ちょっと行ってこいっていうのは何なんですか。

岡村 東工大の社工の話をしたっていうのは、丁度そこへ通い出した時に彰国社から電話がきたんだよ。東大の伊藤さんっていうのかな。その方の研究室と東工大の原研究室と合同で編集・執筆して欲しい、と。

田口 伊藤滋さん？

岡村 伊藤滋さんのところの研究室と原さんのところの研究室と。で、私にも1本、書いてくれていうから、だから編集委員と一緒に、中、入って。「都市住民の生活と意識」－「横浜」における体験と資料から－という題で。先ほど言ってた調査。税金で研究室でこんなにもやらせてもらえたのはありがたいことだし、それはそれで責任を負うじゃないですか。その後、例えば民生なら民生にあって、民生で高齢化の調査をやったってさ、去年やった人が次の年に行ったら、もう死んでたっていうことがたくさんあるわけだよな。そういうのに対して調査っていうのが、または役所がどれくらい本気で対応したのかっていうことを考えると、やんなっちゃうわけだよな。何のために調査をやったんだというのがね。だけど、調査なんかで現実、簡単には変わらないわけだよな。そこがね。で、私もそろそろ移ってもいいんだっていうので、それで、そんならなるだけから遠いところがいいに決まってると思って、それで文書課。文書課なんて、通例の役人的な格好してやればいいわけだからさ。要するに普通の役人に、私はこれならできるかも知れないなというのを、一遍、確かめてもいいなと

思った。

田口 だいぶ都市研の実像というのが分かってきましたし、市の中、あるいは飛鳥田さんの関係も含め、田村さんとの関係でも、なぜそういうことなのかというのも分かったような・・・。

岡村 だから、さっき言おうと思ってたのは、要するに普通の論文だよな、ちゃんとこういう手続き踏んでやってきた全部の調査を、一本にまとめたんだけども、それは、どういうふうになっているのが分かりやすいかな。たまたま彰国社の、でも、必要な時期に表現する媒体がなければ紹介出来ないわけじゃない。役所の中のことは、もう、都市科学研究室を離れて、次の仕事してるわけだから、ちょうどいいと思って。まして、『土木大系』なんていうのは場違いだけど残るもんだしね。だもんだから、そこで書いたら、今度は怒るんだよ、池沢さんが。総務局長。高速道路課に長く居た。

田口 池沢さんが？

岡村 池沢さんが。総務局長やったでしょう？

田口 はい、やりました。

岡村 そのとき、私の資料館やってるときだったんだよ。行政部長が宮原さんという助役やった人だったわけ。

田口 池沢さんですか？

岡村 池沢さんと宮原さんだったから、こっちはスムーズに動けたわけ。例えば、東京の表参道でブルーム氏と個別資料の値段交渉やってるときに、要するに向こう側が、あと 200 万、欲しいっていうんで、電話、入れて、昼間さ。すぐ相談してくれと、夕方迄に出せるか出せないかっていうのをね。無茶な話だけど、ちゃんと対応してくれた。

田口 それで池沢局長が怒ったのですか？

岡村 いや別に。最後に館長人事のときに、遠山さんをお願いしたんだが、なかなか落ちなかったのよ、一緒に練馬迄説得に行こうと、池沢さんが。行く途中で、「おまえがどうして『土木大系』のレポート書けるんだ」と、「私は理事だぞ」って言うんだよ。「理事の私のところに何にもこないでね。全然、技術も何も知りもしないのが、なんで書くんだ」って言う

からさ。「なんで書くんだって、あんただって高速道路の建設が専門の技術屋さんなのに事務系の総務局長やってんじゃないか」とか、「そりゃそうだな」っていうような話もしてさ。だから悪もんじゃないかったですよ、彼もね。そういう話、分かるカラッとした人だった。ただ、あそこはもう京大の連中がたくさん集まっちゃったからね、それはそれで。

田口 ちょっと今、ここで一瞬、止めて。

岡村 じゃあ、もっといろいろ質問？

田口 お二人としてはどうでしょう。あるいは檜楨（リモート参加）さんもどうでしょう。

青木 前回、お話、伺ったときに、科学的行政っていうのは二つの流れがあるんじゃないかっていう話を、ちょっと意識しなきゃいけないなど。やっぱり、今日、話を伺っていて、田村明さんも自分なりの科学的な行政っていうのを持っていて、やっぱり岡村さん、あるいは松本得三さんなんか科学的な行政っていうのを持っていて・・・。

岡村 当たり前だと思ってるからね、それ。

青木 その流れっていうのは、向いてる方向がやっぱりちょっと違ったのかなっていう感じがしますので、そこら辺はつながったほうがよかったのか、それとも個別に独立したほうがよかったのか、そこがまず問題になるかと思います。

岡村 いい質問だね。そう言われると私のほうもよく分かる。つまり、どういうことが起こったかというと、先の東工大へ行って帰ってくるときに、一応、報告書、出さないといけないわけだね。私はもう、だから、これを出した後で、彰国社の原稿もそれで代用するから、もうこれで役所やめてもいいと思ったわけ。それで、田村さんに出したんだよ。そうしたら、田村さん、ぱっと目を通して、「君ね。僕はこういうことを求めなかった」と言って、「はんこを逆さに押すからね」って言うんだ。だから、「そうか。ただ、じゃあ、人と話をするときに、机の上に足、乗っけるのは許してくれ」って言ったんだけどさ。だけど、それはもうひとつのことがあって分かった。地曳さんと住工混合地域の調査やったわけだよな、南区と神奈川区で。彼は川名吉エ門さんとお弟子さんだから、文京区あたりの混合地域でたくさんやってる。地曳、なかなか担当職場で浮上できなかったもんだから、要は調査季報と一緒に私も、中川さんは神之木とあれ一本でいってるから、南の、南区の所にもあるじゃない、混合地域？ それと、あともう1カ所、2カ所とってやって。それで要するに、プロジェクト方式とか何とかじゃなくて、普段の転がしみたいなのでやったら、田村さんから二人、呼ばれてさ。「今、こういうことをやらないっていうか、やれないじゃないか」と、「やりたく

たって」って言うわけよ。「今、やることは大きな筋をつけることであって、これはもう少し後の課題だ」って言うんだよ。だから、田村さんとしては、嫌じゃなかったんだけど、こういうのを載せるなど、まだ。もっとこの六大事業、基幹事業だな。港北ニュータウンの何とかとかね。アーバンデザインの課題などとかというのがね。そういうことねと。それじゃ、けんかしてるわけでもないわけだよ。ただ、まだそこまで成熟してないっていうのかな。両方が支え合うっていうところまではね。

青木 だから、ちょうどこの調査季報38号、1973年のところに、岡村さんと地曳さんの・・・。

岡村 載ってたでしょ？

青木 行政研究が載ってますね。

岡村 そう、あれ、怒られたのよ。えらい勢いで怒られてさ。

田口 すいません、ちょっと確認だけ。その調査、一番は何を目的にした調査ですか？

岡村 どれ？

青木 住宅環境と生活環境を調査するっていうんで・・・。

田口 だから、劣悪なる住環境は今、こんな劣悪なんですってという実態・・・。

岡村 それはスラムクリアランスみたいに、一遍に再開発なんていう手法だけじゃ駄目なんですよと、そこに住んでる人たちの、何ていうの、親近感みたいなものがあるわけでしょう、神奈川でやってるっていうのは、そばにいつでもやめたり、そちらをやめてもこっちで救ってくれるっていうような、そういうコミュニティがあって、だから郊外の企業からの新たな勧誘があったり何とかっていうのがあっても、そっちに丸、付けないわけだよな、調査のアンケートで。だから相身互いっていうのもあって。だけど、何とかしてほしいなという、そういう調査をやっているときの住民の・・・。

田口 だから、そういう状況が分かったとしても、今、田村さんの気持ちとしては、じゃあ、それを今、行政サイドからどういう手段でどういうことができるのか、と思っているかという話でしょう？

岡村 そう。

田口 今、課題をあぶり出したんですけど。あぶり出したのはいいんですけど、次、どうするんだ、君たちは。

岡村 そう。そんなことは、特に川名さんからもらってるんだからさ、地曳さんはね。

檜 榎 これがやっぱり面白いって個人的に思ったのが、内藤惇之さんも、これ、関わってるじゃないですか、調査のところ。内藤さんが同じぐらいの時期に、宅地の質を向上するべきだっていう論文を書いているんですね。だから私、その話を聞いたときに、この話は企画調整局からちよどこういうことをやって、その後の政策につなげてほしいとか、そういう意図で連携があるんじゃないかっていうふうに思ったんですよ。ところがこれ、そういうわけではないんですね？

岡村 そう。

青木 だから、その後、どうしていくのかっていうふうに思ったときに、そこが結構、重要じゃないかなって思っています。やっぱり宅地開発要綱の運用なんかをちよどこしてたぐらいの時期なので、それが結び付いていくと、多分、コミュニティをもっと活性化するために、宅地の質を向上しなきゃいけないんだっていうことは、田村さんもいってるんですけど。

田口 どちらかという、内藤惇之さんはやはり、次、どうするかっていうのを、常に考えながら動こうとしているタイプの人ですよ、あの人の性格からいうと。

岡村 そうだね。

田口 ちょっと地曳さんよく分かんないし、正直なところ、岡村さんもよく分かんないんだけど、割とお二方、こんなに課題あるぜ、さあ、みんな見てよ。じゃあ、後、どうするんですか。それは君たち考えてよ。

岡村 そう。

田口 それだと多分、田村さんの性格からいうと、田村さんそれを許さないから。君たち、ちゃんとシナリオを考えて。そういうことですよ？

岡村 そういうことだ。私も言われて、それはそうだと。けども、やっぱりそこにも目を配ってるというのは、知らせといたほうがいいよと。

田口 でも調査季報を全部読んで、その調査をやったのも当然、知ってるけど、これってすごくディープな調査なんだけど、この後、どうするつもりだったのかなと思いながら読んでたんですよ。

青木 この時期の調査はすごく面白いんですよ。だから、これがどう結び付く。中川さんも同じような感じで、貧困層の住宅の調査してるじゃないですか。あれをどう、逆にあれをうまく生かしていったら、例えば、住宅を拠点にした支援とかに開ける可能性もあって、すごい先進的だったと思うんですよ。それが生かされなかったとしたら、そこを特定することが、今の都市問題を考える上でも重要だと思うんですよ。そういう意味で今、お話、伺って、とても興味深いなって。だから、やっぱり田村さんとしては、これを、じゃあ、あなたたちさらにもう少し解決策まで示してくれってということだったんだなってというのが。

岡村 ただ、それで全体の市政の方向はそっちで進みますよっていわれるけど、今、そういう状況じゃないとすれば、何が主で何が従なのかと。やるなどはいわないまでも、できねえだろうと。

青木 逆にそこで課題になってくるのは、田村さんは、じゃあ、何をそのときは主にしていたのかなってという見方がありますよね。

岡村 それはあるよね。

青木 都市科学研究室としては、こういうのを、とにかく調査を上げて、それで考えてほしいってことですか。

田口 でも、田村さんの10年間でやはり筋道を付けようとしたのは、プロジェクト的なこととか、最低限の宅地開発要綱にある仕組みとか、だから、面的な、たまたま一番、最初の頃は寿のこととかをおやりにはなってたけども、ああいう根深い地域的なものっていうのは、ちょっとやりきれなかったですよ。

岡村 そうですよ。無理だよ。だって、1人で何とかっていうんじゃないで、その組織自体が、何ていったらいいのかな、そういう方向に個人個人が腹くくってかないとき。ある人は9時5時で終わりになっちゃって、先、帰るわっていうんじゃない。対象相手がそんな時間、どうしようもないもんね。

青木 ある意味、田村さんも選択をしていかなきゃいけなかったんですよ。



岡村 だけど、そうはいったってやっぱり、田村さんは多くの人を育てたと思うよ。

田口 本当に。

岡村 すごく。きっかけもつくったしね。そういうのをね。そのことで、よく文句いってったよね。鳴海さん、ずるいと。そういう組織持たないで。組織を持つっていうことは、組織的に人をやる、システムとして対応できるようにさせてくのにさ。

田口 つい最近、関連する調査で浅川さんともう一人、NPOの会員の工学院大の先生と研究を始めています。横浜の市街化調整区域の指定戦略って結構ユニークです。スプロール地区、住宅がスプロールになり始めた所も調整区域に入れ込んでいます。それって他の市から見ると、ちょっとユニークというか。だから、入れ込んでコントロールしていくということだったけど、田村さんの10年間ではコントロールは当然し切れなかったし、その後もしきれなくて、入れ込んだけどずっとスプロールのままだんです。時間が止まったスプロール地域というのが調整区域としてあって。他の市町村の人から見ると、これが調整区域ですかっという、そういう感じになっちゃう。田村さんとしては、その後の時間の中でいろんな施策を打って、それを改善していくことを当然思っただろうけども、それはにわかにはできなかった。

岡村 だからやっぱり複数っていうか、全体が、組織自体がやっぱりそっちに向かないと難しい話だよ。

田口 浅川さん、どうですか。

浅川 私も調査季報の目次をまずぱっと見たときに、この時期にこういう問題意識を持っていたのかって、結構、早熟だなんていう問題意識がそこかしこにあったんですよ。それを早熟というふうに感じるということは、結局、問題意識と政策の実現との間に、時間的な距離が結構あるということからすると、やはり、そのときの問題意識っていうのは、必ずしも政策に何か直結してたわけではなかったのかなっていうのが、今、お話を聞いてよく分かりました。あと私は宅地開発要綱、横浜の事例って非常によく話題になる事例ではあるんですけど、先ほど田口さんがおっしゃってた、調整区域に取りあえず取り込もうというような行為とか、結構、横浜は、何かシステムを作ってやるというよりも、まず結構、人材がいて、人で、オペレーションで何とかその場その場でやり切れちゃうようなところがあるので、何か制度ですっきりやるというよりも、そういう曖昧としたものを取りあえずたくさん。だから、スプロールは止めたいんだけども、取りあえず保留とするようなところを、結構、たくさ

ん持っておいて、あえてそういうふうには持っておいて、それを人で、そのときそのときで解決するっていう横浜式なところがあって。だからこそ、横浜の行政というのが非常にすっきり見えにくいというところを、何となく感じました。

岡村 よく田村さんがいってる非定型流動型っていうやつだね。

浅川 それがまさにいろんなところに出てるなって。

岡村 出てる。

田口 檜さん、なんかご質問ありますか？

青木 檜さん、何かご質問ありますか。

檜 いや、黙って聞いてます。大丈夫ですよ。

浅川 その工学院大学の先生、札幌でずっと都市計画行政されてた方なんですけれども、「札幌はこういうことはしない」と。「札幌はちゃんと総合計画を作るんだ」と。「総合計画に作った計画を末端に落としていって、粛々とそれを実現していくことを。だから、何かルールというのがあって、それに従ってやってくんだ」というようなことをおっしゃってて。「横浜は総合計画ってちゃんと作ってるのか」みたいな。あんまり、作ってはいたものの、それをちゃんと・・・。

岡村 ちょろちょろ変えてっちゃってね。

浅川 「ちゃんとそれに従ってるっていうのが見えない」っていうんですね。

岡村 そうだろうね。

浅川 確かにそれかなみたいな。総合計画軽視というか、それが逆に横浜らしいというか。ルールにはめて、型にはめてたのでは、ある意味、遅かったりとか、現実が見えなかったりとか、思考停止になったりとかすることを恐れるっていうところがすごく感じました。それが活気のある企画調整室とか、そういう一団のグループがいて、人が元気な、優秀な方がいっぱいいるような時代は、何とかそれでうまくできたんですけども、今になってシステム化しない横浜方式だけ残って、人がそういうマインドを持ってなかったりすると、それはなかなかうまくいかないですねっていうのが、今の横浜っていう感じも、何となく、今、してい

て。

田口 人材を、松本学校で育てた。田村さんは仕事の現場の中で育てて、その後も若手の勉強をサポートしてくれたりして、鳴海さんはどう、鳴海さんは人を育ててないんですか。

岡村 仕事上、そういうのをやってないからね。

田口 でも……。

岡村 だって、政治の内外調査だとか、そういうやつであって。だから、ナルミンジャーなんていわれたけどさ。そういうのは別に他の自治体だっていいわけで。だから、横浜市役所の中にそんなに多く必要としない。

青木 結構、面白いというか、何となく今、ちょっと浅川さんおっしゃった話に引き付けて考えると、結構、横浜って非定型流動型をやるときに、なんか概念を持ってると思うんですよ。田村さんだと、例えば景観とか都市デザインみたいに、それを持ってくることで自由にやらせようみたいなものって。何となく、松本さんだと、文化とかがそれに当たるんじゃないかと思うんです。岡村さんも実際、文化行政をされていたので。それって横浜だとうまくいったんですけど、じゃあ、それ、鳴海さんにそういう概念って何かあるかなというと、あんまり思い当たらないんですよ。

岡村 そうだよな。

青木 そこなんか役割の違いなのかと思うんですよ。

岡村 一つは、例えばこれ、僕、書かれてるような革新自治体の、例えば、何ていうんだ、細かいことよりも、やっぱり市長をとにかく支えるっていうのかな。そっちが強いついていうか。だから、そのときに親衛隊みたいなのがいたってしょうがないんであって。2人の話で、こちらが潜ってけりをつけるという、そういうもっとタイトなところをやってたんだと思うんだな。

田口 でも、鳴海さんの演出というか、ああいういろんな政治闘争をやることで、横浜市っていうのは、国に対しても、世界に対しても、ものが言えるようになったのは、市職員たちにとって自信にはなりましたよね？

岡村 だけど、継続してそれをやっていけないじゃないですか？ そのときそのときだか

ら、そのとき出会えた人じゃなければ見れないわけじゃない？ そうでない組織上の仕事だったら、誰でも見れるでしょう。

田口 なるほど。

青木 やっぱりそうすると、当初、この研究やってるときに、田村明、それから松本得三、鳴海さんと、その3人のトライアングルで動かしてるんじゃないかみたいなのがあったんですけど、ちょっと鳴海さんだけ浮いた感じが。

岡村 それは1人だからなんだよね。

青木 組織を持ってるか持ってないかっていうことで？

岡村 そう。だったと思うんだよね。

田口 仮の話ですけど、そうすると、松本さんや岡村さんの存在の重要性、有用性っていうのは分かるし、当然、田村さんも分かるし。仮に鳴海さんがいなかったとしたら、飛鳥田市政というのは動かなかったですかね。

岡村 それはあると思うよ。動かなかったんじゃなくて、その間のつなぎ。私たちが来る前のときの。

田口 1期目ね？

岡村 1期目、2期目。2期目で都市研だとかそういうのをつくったり、田村さんを引っ張ってきいたりするのがなければ、そういうときに機能したんであって、来ちゃえばそっちに任せちゃうわけだからね。

青木 やっぱり鳴海さん、1期目のときの印象が強い。

岡村 そうですね。1期目は自分が全部だからさ。だから、そういう点で、次のもう課題に。だから、今度、浮いちゃうときが出てきちゃうわけだよ、彼が。完全に浮いちゃうなんというとき、新貨物線に座り込まれてやられたときだよな。警察へ行って、占拠した市民の排除を頼んだ。市庁舎の市民広間、全部、やって。

田口 新貨物線は鳴海さんが一応、やっていますよね？

岡村 そういう持っていき方したでしょう。市民局が窓口じゃないですか。そしたら、私が1970年にいったときに、「新貨物線はどうなってるんだ」って言ったらさ、「この4月から、私たちいないんだって」と、市民局がいうわけ、市民局の相談員やなんかが言うわけ。「どうして」って言ったら、「もう公害対策局が鳴海さんのところに直接、持ってくというのであって、関わらなくてもいい」っていう、そういう言い方してたな。だから、私はあそこの住民、市民のところは出入り自由だったから、宮崎省吾さんともちょこちょこ会ってるし、それから、遠くのところに行っただって、別に。それで、さっきの白書だって時代だね。できるだけ少しでも多く、市民運動、住民運動っていうのが広がるように、連絡先っていうところね。新貨物線だったら宮崎省吾宅、なんの何番地っていうがさ。今じゃもう、ぶっとばされるようなのを、わざとたくさんの名簿を作って知らせるとかね。それで私の方からもずっと市民の話、聞きにいったから。意外とだから、こっちが直接、行っちゃうと会ってくれるんだよな。

田口 すいません、田村さんにも直接、聞いたことあるけど、「いや、僕だったらああいうやり方はしなかったよな」っていう言い方してましたね。

岡村 そうでしょう。いい市民、悪い市民のね。

田口 ああいう運営の仕方、対応の仕方はしなかったっていうことなんでしょうけど、あれって鳴海さんの失策なんですか。

岡村 うん。論理的に「広報」でそれを書いちゃったんだよな。臨時号を出したんだよ。臨時号、出して、それで広報担当課長はもうそれ、頭きたって行ってやめちゃうしさ。要するに住民から市民に変わんなきゃならないんだと。市民からまたもっと広がってという、そういう書き方したわけね。今やってるのはエゴ、地域エゴじゃないかという書き方したわけさ。そうしたら宮崎省吾の論理にはまっちゃうわけだもんな、完全に。地域と・・・。

田口 それで解決できると一瞬、思っちゃったんですね？

岡村 出せば収まると思ったけど、そうはいかないよな。かえって油に火がついちゃったみたいなものさ。

田口 あれもちょうど、2期目が始まるぐらいのときでしたっけ。

岡村 2期目がもう始まってたよな。私はだから、その選挙でどれくらい新貨物線問題の影

響で飛鳥田批判票が出るか調査したら、そんなに出ないわけだよね。けども、反対運動側から何を問われてくるかっていうのを知りたいっていうことだったね。何をやるかっていうんだったら、直接、行ったほうが早いからさ。宮崎省吾の所へ、「次の手は？」って言って聞いたけどね。先週も会ったけど。上田から出てきてさ。

田口 お元気ですか。

岡村 元気だね、彼は。

田口 お幾つなんですか。

岡村 もう 85 だね。

田口 興味本位で一度、お会いしてみたいですね。

岡村 とにかく元気。

田口 しかし、ちょっと鳴海さんの話に移って、鳴海さんの的にいうと、それでどうだったんですか。

岡村 ただ、だけどアイデアとしてはいろいろ彼が気が付いてさ。それは自分一人でやるわけにいかないから、何局にとか、どこどこへと分配はするわけだから。だけど、鳴海的な人をつくるというのは、あんまり意識しなかったんじゃないの？ もう、自分ひとりでたくさんだと。

田口 そういうことですね。あとはテニスやってね。

岡村 そう。

田口 よく山手でテニスやってました。

岡村 そうでしょう。

田口 よく見ました。鳴海さんがよくいわれているのは、田村さんと呼んだのは私です。それは、そうだと思います。

岡村 うん。

田口 そこは。

岡村 もっと前から・・・。

田口 知ってるんですよね、お互いね？

岡村 そう。

田口 どうも、実際、そうなんですよね。あその環境開発センターに出入りしてて。飛鳥田さんもそうだったらしいですね。

岡村 そう？

田口 飛鳥田さんもその当時から知ってるらしいです。

岡村 だから、あんまりそういうところもさ、この前、言ったけども、都市研の他に先にあった市政調査会っていうのと、それから鳴海さんのとこの都政調査会と、三つあったけども、どこも人、少ないんだよ、やっぱりね。例えば、鳴海さんのところでも、何人も雇うわけにはいかないじゃないですか。大体、3人か4人の研究員で転がすわけだけども。鳴海さんの後に、神原さんが入ったりね。それから菅原良長っていう人が仙台の市長のとこ行ってとか、そういう感じで、私はよくやったと思うけど、鳴海さんは。

田口 鳴海さんね。そうだと思いますよね。

岡村 何でもっていうか。つまり、都市研っていうのは、これ、きょう、お渡ししとくけどね。この後の人たちがそれぞれ受けてくわけだから、きっと都市研っていうのは全然、根っこができてどうのこうのじゃなくて、そこで松本学校きた人たちも、偉くなって局長さんになってる人もいるし、ずっと研究してる人もいるし。だけど、都市科学研究室に戻るわけにはいかないわけだからさ。そうすると、次の人が一応、都市科学研究室くるわけでしょう。田村さんだって室長になるわけだからさ。そのときそのときの都合で、何ていうのかな、組織みたいに何とかイズムがずっと残ってっていう具合にはいかないんじゃないかな。だから、最初の7年間とか、次の何とかさんの時代とかね。ちょうど松本さんも私もやめるときに、北小路さんとそれから彼、青木虹二さんっていったかな、市大の、青木虹二さんと2人が呼ばれたわけ。要するに都市研をさらさらにするためにだな。市大の学生課長と、それから北

小路さんと。それで2人は新聞の編集が好きだったんだよね。北小路さんは京大の新聞部の出だし、それから、青木虹二さんは一橋の新聞、学生新聞だった。だから、編集業務自体が楽しくてしょうがなかったんだと思うんだな。

田口 北小路さんって名前からして、いかにも貴族的な感じがしますね。

岡村 弟だからね。北小路敏民の弟で、それでお父さんも共産党の議員やってたから、もう京都にいるのは嫌だといって、それで横浜に来て、関係ない生活を送りたくて、役人やったけど。アジア卓球の横浜開催であちこちの国にみんな招聘に行って、彼、ベトナムへ行ったんだよな。そうしたら、「飛鳥田が代わっちゃったもんだから、私なんかもう駄目かもしれぬ」ってか何とか言ってるから、「何を言ってるんだよ」と応えたりしたけどね。あの人も面白い人だよな。

田口 まだご存命ですか。

岡村 分からない。

田口 北小路さん、懐かしいな。ちょっと私、感想的にいっちゃうと、さっきので、ぴたっとはまったからよく分かりましたよ。岡村さんがおやりになってたそういう調査というもの奥深さと、田村さんが考えてた都市づくりの戦略性というものとのね。

岡村 だから、後ろの田村さん、この前、私の経歴書、渡したけれども、それぞれ途中で横浜市をやめて再び、田村さんと一緒に市政調査会をやったっていうのは、できたんだと思うんだよね。両方ずつくろうとしたのが、結局は「市民の政府」っていうのかな。要するに、何ていったらいいんだろう、自治体学ですよ。結局、だから都市研の延長っていうのは、流れ流れて今のだと思うんですよ。

青木 まちづくりシンポジウムを開催されたという、それが市民の政府っていう話にやっぱり結び付いていくんですか？

岡村 そう。

青木 結構、ちょっとこれはまだ想像の段階なんですけど、市民の生活論っていうのを田村さんがいうときに、都市科学研究室でやってたようなことを田村さんもやりたかったのかっていう気が。



岡村 そうだと思う。だけどそこまでね。

青木 実行する組織がないから？

岡村 鳴海さんならいいんだよ。鳴海さんなら簡単に。だから終わった後、田村さんは『都市ヨコハマ』を、なんだ、この本を書いた。鳴海さんはテニスがどうのこうのや、ヒマラヤスギの話なんての書いて、汚えっていうんだよね、田村さんは。田村さんが、なんだよ、旅行記、書いたって怒られちゃうよな。田村さんはこれをちゃんと、私は何だったんだっていうことをやっておくべきじゃないかと、次に継ぐためにもと。

田口 鳴海さんはそれをまとめるのが遅いですね。やめたときにそういう総括をやっとくべきでしたね。鳴海さんって何やっていた人だか分からなくなる。テニスマンですか、みたいなので終わりかねない。そういう人じゃなかったはずですから。

岡村 そうだね。

青木 その辺は結構、面白いですよ。ただ、やっぱり田村さんはそういうふうやって、思いがけない形で韓国で読まれてるんですよ。今、ちょうど一緒に研究してる者が、『市民の生活論』を翻訳して韓国語にしたいってやってるんですよ。民主化運動の中でまちづくりっていうものがキーになって、1980年代の終わりですけど、軍事政権が代わったときに民主化運動が活発になる中で、市民の政府論だとか、まちづくり論みたいなのが、2000年代ぐらいになって重要になる。だから、そういう直接の事業にまず結び付かないけれども、こういうもっと広い意味でのまちづくりっていうことを、なぜ田村さんが書きたかったのかっていうとこの一端を、もしかしたら都市科学研究室というものに対して持ってたという気がします。

岡村 だから、最初は都市科学研究室には田村さんのほうが、あれ期待を持ってたんじゃないの？ 要するに岩崎さんやなんかよりも。いた彼らの小さい話じゃなくて、もう少し業務じゃなくて、ふわっとした中からね。一緒に考えてやってくというね。

青木 田村さん、現実にはやらなきゃいけないことに直面して、できないことはたくさん増えちゃったけれども、頭の中にはやっぱりそういう構想がたくさんあったんですね。

岡村 だと思うんだよね。だから、それがさっき言った白書の後書きには、まだすごくそれが柔らかい形で出てるんだよね。だからこれはいい文章だったなと思う。

田口　そういうことだろうね。そういうお気持ちだったんだろうな。

青木　そういう印象がちょっと見えてきて、逆にそれが面白いなって。それが形を変えて、今、外国でそういうふうに使われたり、発展して行って、実際、事業になったりしていることを考えると、横浜での事業とはまた別にして、何かそういうものっていうのは、ちゃんと見なきゃいけないっていう気がしてきましたね。

田口　そうだね。

青木　という感想に近いものなんですけど。檜槇さんが、今。

檜槇　しゃべりたくなってきたんですけど。

青木　ちょっとまってくださいね。

檜槇　しゃべりたくなってきたんですが、いいですか。要するに基本的にうちは田村明の理論をまとめていくのは、一つ、あると思うんだけど、自治体という、位置と役割という点からすると、あらゆる問題を縦割り化している中で、やっぱり鳴海とまた都市科学研究室と、それから企画調整という、田村企画調整、三つがやっぱりその主戦軸としてあったというふうに見たいんですよね。これは田村明が最初からずっと、むしろ彼の自分の発言の編集がそうだったかもしれないけど、これは縦割り行政に対する挑戦をずっとされていたのですかね。その際に三つ、鳴海さんの話と、それから都市科学研究室と、企画調整。一番、分かってないのは、どうも今の話からいうと、分かってないのか、もう議論の必要性がないのか、鳴海さんのことなんじゃないかなと。これは1人で、要するにさっき言われた属人的な要素も強くてね。鳴海さんについては、組織を持たせるわけじゃなかったんですけど、実はこれ、もっと研究をそれはそれとして、例えば自治体の縦割りを修正する軸の一つとして、もっとやってかなきゃいけないと。割りかし、それは常識的になっていうか、通説的な答えは、やっぱり革新自治体というものを、当時の保守日本政府の中で、社会ととってもいい、それを持ち込んだという役割だったっていうことで、もっと研究を広げなきゃいけない。

やはり、もう、きょう、実は大変、期待してたのは、今、議論が少し出てますけれども、都市科学研究室なんですよね。私も政策推進センターっていう形で、市のほうで、実は正直、申し上げて6年間、何もできてないっていったらあれですけども、要するにそれをさっきの「調査季報」とか、あるいは松本さんの「横浜」という包括的な横浜、生活のありようを押し出していくというところを、やっぱもう少し極めていく必要があるんじゃないのかなと。すごく簡単に進められてたようにも、今、ちょっと発言あったんですけど、それは、岡村さんの表現の仕方なんだろうというふうに思うんですけど、「調査季報」という技術ですよ。

「調査季報」という政策技術といったものというのは、われわれも2年ぐらい前からそういうような議論、ちょっとして、非常に官僚的な意思決定過程しかない中で、「調査季報」という、いわば、何ていいますか、論議の技術、論議技術みたいなものが、すごく意味があったんじゃないのかって。そのことがいわばシンクタンクということの、縦割りに対する、私は骨の髄まで日本社会、縦割りだって、特に最近、思ってるわけですね。人材育成も全部、縦割りでできてるし、福祉も医療も、それから都市計画も全て縦割りで、高校ぐらいから縦割り化して人材つくってるわけですね。それに対する自治体という、いわば都市の生活をつくり上げていくんだという位置付けをした上で、なおかつそのシンクタンクとしての都市科学研究室というもので、その中でいわば論議の技術、自発的な職員が育つ論議の技術といったものを、やっぱりもっと前面に出してかなきゃいけないのかなというのを、何となく私自身がそうなのかもしれないませんが、少し平板になってないか。

今、いや自治体シンクタンクってというこというんですが、成功してないですよ。恐らく、一番、大事だったのは、さっき岡村さんちょっと言っておられたと思いますが、「調査季報」があった。「調査季報」っていうのは、今、われわれが連綿と続いてきた「調査季報」を見ているだけなんですけど、それがいつの時代にもそういう縦割りの挑戦が行われてきたっていう、そういう評価をちゃんとしてあげなきゃいけない時期にきたかなっていうふうに思いました。

黙っておられずごめんなさい。ため込んでしゃべっているのです。ちょっとしますけれども、もう一遍いうと、官房系の弱さが今の自治体を限定的にしているっていう気がしてならないんですよ。それに対して1960年代から70年代の横浜は、市民にあるいは住民、今、住民とか市民とかってまた難しい議論が、英語の問題にまで、英語を使用するっていう話もあって、もちろんそれもあるんですが、大事な私はなんか、自治体機能の何か縦割りを生活の軸から切り込んでいくという、これは皆さん、おっしゃられてるところなんですけど、その位置付けにこの3者、鳴海、松本それから田村といった役割機能を整理して行って、そして構築していきたいということなんじゃないのかなと。私は整理の仕方が今、問われてるような気がしてならないですよ。

もう既に対象は見える、けど、それをどう整理したらいいのか。みんな日本中が縦割りで、とうとう内閣府が分野別計画をできるだけ少なくしろという指導を、1カ月ぐらい前の報道で始めたぐらいで、そこまで内閣官房がそういうぐらいのところまで、自治体は縦割りに従順になり過ぎているのが現状であって、それに対する対抗力を持つために、あらためて、鳴海を語るべきだし、あらためてまさに松本の都市科学研究室を語るべきだし、そしてその集大成としての企画調整の田村という、いろんなことですね、非常にうつつと感じながら生活している私でございました。すいません、岡村さんの話、ずっと、そんなふうに受け取りながら、やっぱり間違えてねえなとちょっと思ったということです。

岡村 それはよかったです。

檜 槇 すいませんね。遠くから、あらためて確認したいなおしゃべりでございました。

田口 ちょっと今のを受けて、もう一回、確認ですけど。鳴海さんは、貨物線の話でちょっとみそを付けちゃったっていうのはあった。けれど、あとは一応、見識上は企画調整室企画調整局の専任主幹に籍は置いて、あとほとんど田村さんの部隊との接点がほとんどないままにいつてるように見えてしまうんですが。

岡村 そうなんじゃないかな。

田口 ですか。

岡村 うん。

田口 だから、内藤惇之さんに聞いても、「鳴海さん、何やってたのかね」って言われて、みんな、そういう話になっちゃうんですよね。

岡村 見えないからな。やっぱり一番、市長のこと心配してたんじゃないの。

田口 そりゃ、そうでしょうね。

岡村 同時に僕は飛鳥田がやっぱり一番、うまかったと思うんだよな。その3人をね。

田口 それはそうだよな。

岡村 それで、役所のことは田村君か鳴海君に電話すればいいんだから、私たちと一緒に夜、他都市の市長の選挙応援にいったりしてさ。自分が、要するに市民参加っていうか、革新自治体の理念も、「俺は外から歩いて、市民が関心、持つようにしゃべるから、君たちが中で受け止めてくれ」と。

田口 飛鳥田さんは外にいて？

岡村 うん。外でいろんなことしゃべってくるからね。

田口 それをちゃんと市役所でさばくのは君たちだって？

岡村 そう。そういう感じだよ。

田口 この3人いりゃ、さばけるでしょ。

岡村 十分だっていうんだよ、役所のほうはね。よく議員に言われたけど、どこ行ってますって簡単にいわれたら、選挙応援だったりするっていうけどね。だけど、別に議員のほうもそのことでは文句いわなかったよな。けども、やっぱり、これは本当かどうか知らないけども、鳴海さんが企画調整の責任者になったらよくないという、それだったら企画調整局の設置は阻止するっていうのは、議会で強かったらいいね。

田口 この前、岡村さんが言われてましたよね。

岡村 それで田村さんを中心っていうんでね。鈴木さんはいいわけだけど、そうでないと、鳴海さん入れたりしちゃうと、鳴海さんがその後、つまり力、持ちちゃうってことになるわけだ。そのくらいに思われてたんじゃないかな。

田口 でも、田村さんなら許してあげるっていう感じなのかな。

岡村 田村さん、まだそこのところ分かんないからな、政治的に動くかどうかっていうのは。「誰もが住みたくなる横浜」ということで横浜がよくなる分には、万々歳なんだから、みんな、そのことに関しては。

田口 いわゆる政治的な動きっていうのは、田村さんから感じられないですね。

岡村 そうね。

田口 ご自身もそういうふうには動くんじやなかった？

岡村 うん、その必要はなかったよ。田村さんね。鳴海さんはそればかりなんだから。でしょう？ やることが。

田口 そればかりっていうのは、だから飛鳥田さんをいかに光らせるかという？

岡村 そう。それから市民に危険があれば、自分が泥かぶってもっていう。そうすると今度はいつが跡に取って代わるんじゃないかという、臆測みたいなものが働いて、なんかえらくもめたみたいよね。彼がその企画調整局の主要な席に座るんだってばっていう。

田口 もう一ついうと、田村さんが両方の役をやるっていうことになる大変ですよ。鳴海さんの役もやって、ご自分の役もやって、両方併せ持ちちゃったら、大変ですよ。

岡村 そういうことです。

田口 だから、そこでちゃんと分離していることが、極めて重要だと。だから田村さんらしく仕事ができる？

岡村 そう。

田口 なるほど、そういうことですね。

青木 都市科学研究室については、何となく像が見えてきた感じがします。

田口 像が見えてきて、分かったといえば分かった。

檜 田村の三つの役割を一つ、軸にしなから、田村行政の議論をやっぴりお聞きしたいなあっていう気がするんですよ。何をどんなふうにして、例えば開港資料館も田村行政の一つだとした場合には、その3者がどんな立ち位置で、どんな位置付けだったのかっていうふうに進めてもらえれば、大変、具体論として見えてくるから。

田口 現実的にプロジェクト室なんかでもそうだし、企画調整の後半のときに、いろんな文化的な政策についての検討をやり始めてますよね。美術館の話もそうだし、いろんな動きが出始めて、その中の一つとして開港資料館があるというふうに、私なんかは見ますけどね。

檜 私などが例えば文化行政っていったときに、要するに行政の文化か、文化の行政かというキャッチコピーが、すぐ出てくるんですよ、キャッチがね。つまり、行政を外に、行政の枠組みを超えて、市民とのつながりをつくっていく。あるいはいわば行政を超えるっていう、文化行政と、それから外側にある市民活動とか、あるいは企業の活動を行政の中に分かりやすく翻訳していくという、だから、そういう二つの、何ていいますかね、ベクトルがあって、その二つのベクトルが相互に合流しながら、いわゆる文化行政が出てきて、その中に開港資料館があるという議論が、ちょっと分かりやすくなっていうふうに、私はちょっと感じていて。その中で鳴海は何をした、それから調査季報を持っている都市科学研究室は何をした、田村明は何をした、そんなふうに見ていくと、すごく見えてくるかなと。いわば、自治体政策としての飛鳥田体制がですね。という、それは恐らく今の自治体に対するヒント

として、提起できるんじゃないかっていう気がしましたね。

田口 ちょっとそれは別途、整理しましょう。それで岡村さんにどう語ってもらうかを考えて、またお願いしましょう。